

横須賀港



横須賀市みなと振興部

〒238-8550 神奈川県横須賀市小川町11番地

☎046-822-4000

URL : <https://www.city.yokosuka.kanagawa.jp/6620/minato/>

1. 概況

〈沿革と現状〉

横須賀港は、慶応元年(1865年)、徳川幕府の勘定奉行であった小栗上野介忠順とフランス人技師フランソワ・レオンス・ヴェルニーが、横須賀村に造船所と製鉄所の建設を開始したのがその起源である。その後、明治17年(1884年)に横須賀鎮守府が設置されて以来、軍港として発展を遂げた。

終戦後、横須賀港は、昭和23年(1948年)1月1日に貿易港の指定を受け、昭和25年(1950年)の「旧軍港市転換法」の施行によって、横須賀市は「平和産業港湾都市」として新たな歩みを始め、横須賀港は、昭和26年(1951年)1月19日には港湾法の規定により「重要港湾」に、また同年9月22日には「準特定重要港湾」(国内産業開発上特に重要な港湾)に指定され、その後、昭和28年(1953年)4月1日に横須賀市が港湾管理者となった。

横須賀港の港湾整備は、昭和42年(1967年)9月に策定した横須賀港港湾計画に基づき整備を進め、その後、一部変更、改訂を重ねたのち、平成17年(2005年)3月に改訂を行い、現在に至っている。

横須賀港は、北は追浜地区から南は野比地区まで13の地区からなり、主な地区の特色は次のとおりである。

追浜地区は、自動車、造船をはじめとする本市最大の臨海工業団地が形成され、港湾取扱貨物は、主に完成自動車や鋼材などが専用ふ頭で取り扱われている。

長浦地区は、かつて食糧輸入、自動車輸出、捕鯨基地などで賑わっていたが、現在は、主に砂利・砂、廃土砂を取り扱うとともに、防衛機能が集約統合された。

本港地区は、在日米海軍基地及び海上自衛隊横須賀地方総監部をはじめとする自衛隊施設が集中している。

新港地区は、ソーラス条約に対応し、完成自動車の輸出や水産品(冷凍マグロ)の輸入・移入が行われるだけでなく、クルーズ船の寄港の際にも利用されている。また、中心市街地に近いことから、平成27年(2015年)には、裁判所や警察署などの官公署の移転が完了した。令和3年7月には北九州港との間で新たなフェリー航路が就航し、令和4年(2022年)春には、地場産物総合販売所「よこすかポートマーケット」のリニューアルオープンも予定されていることから、横須賀港のさらなる活性化が見込まれる地区である。

平成地区は、昭和59年度から平成4年度にかけて行った埋

立事業によって誕生した。港湾施設は、砂利・砂等の建材を扱う岸壁及び荷さばき地などを整備し、その背後の埋立地は、海辺ニュータウンとして、事業所、工業施設、うみかぜ公園などの港湾緑地、住宅、商業施設が整備され、総合的なまちづくりが進められている。

浦賀地区は、造船所が立地する工業地区であったが、遊休化した工業用地の海洋性リゾートへの転用が図られるとともに、住友重機械工業の浦賀艦船工場が閉鎖されたことから、新たな魅力ある港づくりを目指している。

久里浜地区は、砂利・砂等の建材、廃土砂等、内貿貨物取扱港として利用されている。また、千葉県浜金谷港間のフェリーや、ゴールデンウィーク及び夏期を除く時期には、伊豆諸島間への旅客船定期航路が就航している。なお当地区は東京湾口部に位置し、船舶の輻輳する浦賀水道航路を通らずに利用できる地理的優位性がある。

〈将来計画〉

横須賀市は、「海洋都市」「音楽・スポーツ・エンターテイメント都市」「個性ある地域コミュニティのある都市」の3つをまちづくりの方向性として掲げ、市内経済の活性化、人口減少・少子高齢化への対応、子育て・教育環境の充実、魅力的な都市環境の実現などに向けた施策を展開している。

港湾においては、横須賀の持つ地理的優位性、歴史的遺産や良好な自然環境といった個性を活かし、地域はもとより、首都圏経済の活力の維持・向上に貢献することを目指している。

港湾計画では、東京湾口部の立地を活かし、高速海上物流に対応した内貿ユニットロード拠点の形成を図り、首都圏における国内物流の一翼を担うとともに、モーダルシフトの推進、他港との機能分担を踏まえた効率性の高い港湾施設整備、防災機能の強化などに取り組んでいく。また、港湾の利用と調和を図りつつ海域環境の保全・再生を進めるとともに、人々が楽しめる海辺空間の創出のため、海洋性レクリエーション機能の充実などに取り組むこととしている。